

# ベルグソン哲学における 《生命》の持続について

三原武夫

(昭和41年10月31日受理)

## On the Problem of the Duration of Life in View of Bergsonism

by Takeo MIHARA

### Abstract

The basic element to determine Bergson's standpoint of thought is to be found in his attempt to vindicate the spiritual principle in nature and to assert the superior competence of the intuition.

Bergson objects to the usual concept of evolution because it deals exclusively with the products of evolution. True evolution is a continuous creation in which an "*élan vital*" pushes onward from inside every being in an effort to obtain absolute knowledge concerning the nature of real time, change and creation. This vital impulse is the source of the energy which impels a being to improve itself and to push over any obstacle which bars the way.

Such views, expressed in unique and vigorous language, placed Bergson in square opposition to the modern positivist movement. The principal objection made to the theory of creative evolution is that its use of a mysterious vital impulse and its substitution of intuition for intellect lead to understand his standpoint as a mysticism or romantic philosophy. But is it really so?

At the first glance, his attitude to explore seems like that of an artist. But his direct effort is to examine nature afresh in the light of a more concrete experience and scientific research. It is worthy of remark that science and philosophy are wholly unified in him, and its unification shapes a motive force of his thought. According to such views nature is neither the dead formulae of scientist, nor the abstract construction of human intellect, but a productive process that has generated and sustains all vital beings.

It seems to us that his doctrine concerning the vital duration is the only way to surmount the domination of mechanistic view of evolution of life, when it is not only an ever-changing flow, but also a creative force. In his view of vital duration the nature or the realm of mere appearance will be born anew, we believe.

自然界の生成発展の原理的説明をめぐる目的論と機械論の対立抗争は、形而上学的実体論の分野のみならず、生命現象、精神現象一般にもおよぶ問題として、今日においてもなお一貫した重要性を有するものと考えられる。19世紀以来の実証精神につらぬかれた自然科学的世界観は、たんに物質・生理現象のみならず、生命現象、いな歴史的・社会現象をも、まったく唯物論的に解釈せんとする機械的因果論の立場をいよいよ強固ならしめた感がある。しかし、自然界における無限の創造過程、ことに生命現象のすべてが機械論的に説明され得ないことはいうまでもない。一方19世紀末から20世紀はじめにかけての生物学の躍進は、かえって従来の粒子的な機械論に行き詰まりを感じしめ、新しい形の目的観～新生気論、全体論など～を輩出せしめるに至った。

ところで、ベルグソンの哲学は、以上の対立的立場のいずれにくみするものであったろうか。結論的にいえば、それは、19世紀後半を風靡した実証主義的唯物論ないしは近代的科学合理主義へのアンチ・テーゼとして、時代の最も深刻な課題に応えようとしたものといえるが、それ故にはたして、これを唯心論ないし神秘主義的生命論といった偏狭な視野でもって論ずることができるか、どうか。

その点を明らかにするため、われわれは以下において、近代の新しい生物進化論的学説の影響の下に、ベルグソンが生命の進化ないし持続の問題をどのように考察したかを検討して見る必要がある。これによって、《生命》なるものの理解がいかにかに唯物論的仮説以上の何ものかを必要とする点があらためて見直され、ベルグソン哲学の特質ともいうべきものに、われわれの新たな観察の眼が開かれる一助ともなれば幸いである。

## I

ガリレオ以来の近代力学にもとづいて、宇宙を一つの大きな機械と考え、すべての生成現象を物質の運動から説明しようとする機械論的世界観は、物理学のみならず生物学の領域にも波及したが、なかんずく、19世紀のダーウィンの発見が当時の人びとに教えたことは何であったか。それは要するに、最も低位の段階から最も高位の現実の形態に至る生命の進化とは、物質的純自然力の一定の法則に従って発達し、その間、種相互に環境条件に適応して生じたわずかな変異がしだいに集積して新しい種の形成に至る、ということである。つまり、ダーウィン以来の生物学者たちは、生物の種の発生の原因をどこまでも機械論的に理解し、われわれが機械を組み立て、また製造するときの操作と同様に進化を理解しようとするものである。

かように物質が生命を規定する、あるいは偶然的原因によって徐々に進化が遂行されるといふ主張に対して、ベルグソンは、生命ないし生命の流れこそ進化発展の原動力であり、すべてである、との主張をもって対決せんとした。彼はその名著「創造的進化」(L'évolution créatrice)のなかにおいて、実証科学の研究成果を哲学のなかへとり入れながら、科学の対象としての物質と哲学の対象としての精神とのあり方の相異を、進化の観点に立って内容的に究明して

いる<sup>1)</sup>。

彼によれば、諸現象の刻々の進化発展を因果的機械論的に説明することは、ア・プリオリには認められない。彼は生命を《意識》、あるいは意識に似た何か〜生命の推進力 (la poussée vitale)<sup>2)</sup>に結びつけて考えるのである。すでに「意識の直接所与に関する試論」(Essai sur les données immédiates de la conscience) のなかで、彼は物理・化学的現象と生命の領域 (le domaine de la vie) とを区別し、前者を支配する法則が後者に妥当しないことを主張しているが、<sup>3)</sup> この方向が徹底的に追求されたのは、何といても「創造的進化」においてである。

有機体は、機械のようなたんなる集合体とはちがひ、みずからに適応した形と構造に達しようとし、またこれを維持しようとする内的推進力ともいふべき存在なのだから、このような進化過程を機械的に説明し得ないことはいうまでもない。いまかりに、数万年の昔に唯一の母体から二つの大きなグループが分岐して生じ、それぞれ単独に異なった方向へと展開してゆくばあいを想定してみよう。もし機械論が真理であるならば、そこには異なる2系列の変化にやどる全体としての指導的イデー、あるいはそれらの両者に共通する要素というようなものは何も考えられないのであるから、進化はたんに盲目的な因果作用によって、一連の偶有性がたがいに相加わって生ずるということになる。従って全く相異なる偶然的な2系列の進化が相似たおなじ結果をおなじ秩序において生じることなど、とうてい望み得ないとしなければならない。さらに、この進化の系列がさまざまに分岐したばあい、偶然的な外的変化や内的変異がこれら系統において、同一の器官・構造をつくり出すことなど、ますますあり得ないことだろう。ところがわれわれは、数千万年にわたる相分岐し独立した進化の結果において、それと全く相反する事実を目撃する。偶然の諸原因が偶然的秩序をもって現われながら、しかも幾度となく同一の成果を生み出す事実は、単なる機械論的仮説をもってしては、とうてい説明しつくし難いことがらである。たとえば、植物や動物の一般的比較についてみるに、それらはいずれも、はるかな昔に共通な幹から発し、幾千万の原因が結合した結果、それぞれ相異なる環境に助長され、またそれぞれ別個の障害に妨げられつつ独立の線上を進化して来たのであるが、それにもかかわらず、受精作用は動植物のいずれにおいても異なる2個の細胞核が半分ずつ結合し、そしてたちまち互いに等価のものになるという相似た現象がみられる。さらに、生殖的諸要素の準備も、双方とも相似た条件の下に行なわれる。われわれはこの結果を、たんに《適応》の現象として片づけるわけにはいかない。ダーウィン流の《適応》の観念は、進化を支配する外的原因にただ消極的な影響力を帰するのみであるから、進化の途上における極めて複雑な器官の構造の同一性を説明するには決して十分とはいえないだろう。ことに植物における有性生殖の効用が明らかでなく、「すぐれた学者でさえも、植物の生殖作用は、自然がなくても済まし得たぜいたく物だと考えている」(d'excellents esprits voient dans la sexualité de la plante, tout au moins, un luxe dont la nature aurait pu se passer)<sup>4)</sup> とするならばなおさらである。

相分岐した2系統が同様な結果をもたらす事実は、さらにまた動物における眼の構造によっても証明し得られるとして、ベルグソンは次のように述べている。

「たとえば、脊椎動物とホタテ貝のごとき軟体動物との眼を較べてみよう。それはいずれにおいても、同じような要素からなる同じ本質の部分である。ホタテ貝の眼はわれわれの眼とおなじく、細胞組織の網膜、角膜、水晶体を具えている。網膜要素の特殊な転倒は一般に無脊椎動物の網膜にみられないが、それすらホタテ貝にみられる。……軟体動物と脊椎動物とがその共通の幹から分岐した後になって、はじめてホタテ貝にみるごとき複雑な眼が現われたことには何びとも異論がなかろう。ではかかる組織の類同はどこから起こるのだろうか」と。<sup>5)</sup>

ダーウィンの説によれば、複雑な器官の類似はただ偶然にもとづく一連の変異によって形成されたと仮定しなければならないが、しかし盲目的偶然のはたらきがおなじように調整された諸要素のおなじ配列をいずれのばあいにも生み出したなどとは、どうしても考えられない。周知のごとく、ダーウィンは《自然淘汰》と《適者生存》とを、その学説の根幹としている。すなわち、自然は生存競争裡において、有利な変異をもつ適者を「選択」し、環境に不適なものはこれを排除する。しかもこれら変異は偶然に現われるきわめてわずかな変異で、現われる世代ごとに徐々に顕著になっていくが、それらは自然淘汰の影響をうけて、ついには新しい種を生み出すほど際立ったものとなる、というのである。しかし、変化を規定するものが偶然変異であり、しかも自動的に淘汰作用によって漸次的になされると説明されても、「これらの変異を推進し累積せしめるものはいったい何か」、「進化はなぜ進んでより高級な生命の形式、ことに人間を創り出したか」という根本問題になると、明確な解答は何ら与えられない。いかに神の摂理があり、完備したプログラムを仮定してみても、また漸次的変異を外的条件による突然変異的・非連続的仮説におき代えてみても、結局おなじことである。事実の世界はそれに従うにはあまりに多岐多様であり、一律的に形成されてはいないといわねばならぬ。視覚器官のあらゆる部分が激変しながら、依然として眼がその機能をはたらきつづけるように、どうしてそれらが互いにうまく調整し合っているのか。はっきりいえば、いずれのばあいにも、ダーウィンはその原因を《偶然》という逃げ口上に帰しただけである。

しかし反対に、もし《高級な生命形式》という、進化の線上にその形式を達成しようとする内的な指導原理、もしくは推進力があるとみるならば、われわれの見方は機械的因果力のみが支配する純物理的領域を超えて出ることになる。それは胚種と胚種の連鎖をなす生長した有機体を媒介として、胚種の一世代から次の世代に移り行く生命の「根源的躍進」(élan originel)の観念であって、これこそ新たな種を創造する根本原因である。<sup>6)</sup>

「創造的進化」におけるベルグソンの思想は、科学としての生物学を踏み台としながら、しかもそれを越えた形而上学であるが、しかしあくまで変化の観点に立って行なわれたものであり、不断に創造し進化する生命の流れに、いっさいの存在をつらぬく最も本質的なものをも認めんとする生命の哲学であるといえる。ダーウィン説、突然変異説、新ラマルク説と、一々の

弱点をすどく分析し、また具体的事例について証明して、もはやどうにも動きのとれないまでに論証を推し進めていく……しかも彼がこのような批判を加えんとするのは、決してそれらの学説に対して「背を向けようとの意図」からではなく、むしろそれらの進化の各相を通じて一貫する原理的な何ものかを見たかったからにほかならない。

彼にとって、《生命》とは、時間的な始まりも終わりもない根元的な意味をもつものである。われわれがふつう生命の始源について語るばあい、それはたんに個別的有機体のそれを意味するにすぎない。けれども、生命とはむしろ、個体から次の世代の個体へと時間的発展の底をつらぬくもの、発達した有機的個体を媒介として胚種から胚種へと流れるもの、すなわち《持続》(duration)を本質とするものであり、しかも、あたかも榴散弾が炸裂し、その破片がまた炸裂してゆくように、同一の本質的な躍動が爆発的な仕方でも進歩の諸方向に分岐して、生物変異の根本原因をなしてゆくものである。宇宙はわれわれの意識とおなじく、不断に流動してやまない実在であるが、この生成変化を説明するものは、すなわち生命の宇宙的衝動(l'impulsion globale de la vie)にほかならない。がべての有機的存在は最も下等なものから最も高等なものに至るまで、また生命の最初の起源からわれわれの生きている現代に至るまで、あらゆる時空をつらぬいて、ただこの一つの衝動の推進力の下に躍進する。宇宙の根本をなすこの生命の流れ、いわゆる《生命の躍進》(élan vital)こそは、受動的適応を説くダーウィンの進化説の不備をおぎなうて、生命進化の真相を明らかにする鍵である。<sup>7)</sup>

さきに述べた、共通の幹から分岐したさまざまな方向にみられる構造の類似あるいは調和ということも、要するに宇宙的生命としての原理が同一であることにもとづくものであって、決して偶然の結果によるものではない。再び眼を例にとってみても、その器官の複雑さと機能の単純さとの微妙な相関関係は、《本源的躍進》の観念を一層明らかにしてくれる。すなわち「眼は鞏膜、角膜、網膜、水晶体などの相異なる部分から成り、しかもこれら一つ一つの部分の細密さは無限といいほど極度に複雑な構造を示している。ところが一方、視力は、眼を開けさえすれば視力がはたらくほど単純な事実である。まさにその機能が単純であるゆえに、こうした無限に複雑な機構の形成にいささかでも自然の手落ちがあれば、視力は不可能になり、生存競争に落伍せざるを得ないだろう。器官の複雑さと機能の単一性におけるこの対照こそ、われわれの精神を当惑させるものである。」<sup>8)</sup>

機械論は、かような器官が外的諸環境の影響をうけて、受動的にしたいに形成されてきたことを証明しようとするが、しかしそれがどのような形をとるにせよ、《持続》を無視するかぎり、各部分の微妙な相関関係については、ついに何らの解決を与えるものではない。けれども反面、このことが直ちに目的論への同調に通ずると考えるのは早計である。目的論によれば、各部分はある共通の目的をめざして、予定された計画にもとづいて集積されたものであると考える。この点でそれは、自然のはたらきをある意匠を実現せんとする職人のはたらきに帰する擬人的目的観となるのであるが、しかし、われわれは胚種の発達をたんにいちべつただけ

で、生命のはたらきはこれと全く異なるものであることを教えられるであろう。生命は諸要素のたんなる人為的な結合と添加とによっては説明できない固有のはたらき～分離と分裂～によって進行する。視力には眼を構成する細胞や、それら相互の調整以上のもの、すなわち内的成生の面がある。いずれにせよ、機械論も目的論も生命の過程を説明するには十分でないのだから、われわれは、これら両見地をともに超出する第三の道を求めなければならない。<sup>9)</sup>

ベルグソンによれば、哲学の研究対象は、固定した《形態》の世界ではなく、現に流動しつつ絶えず進化する世界である。この進化の過程を現在の成果の中にまで追求するためには、事物の外に身を置いて、断片的諸要素のたんなる人為的構成によって成果を説明する代りに、われわれは事物の内的生成そのものの中へみずからを投入しなければならない。これが哲学固有の機能であると思われる。視力の発達という事実も、意識的あるいは無意識的に目的表象を求めることによって説明さるべきではなく、事実においては、生命の本源的躍進によってはじめて実証さるべきものであり、この運動自体のなかに含まれているのである。この共通の躍進という仮説を認めるならば、視力の発達はこの躍進にとって本質的なものであり、従って、それが視力に固有な器官を生ぜしめ、これを子孫に規則正しく遺伝せしめることも理解し得られよう。新たな種の創造という変異の根本原因も、最も適応した個体を生み出さんとする élan の努力であり、その努力は個体の努力よりはるかに深いものであるとともに、環境とは独立のものでなければならない。彼が最も深くかつ広い意味で《意識》(conscience)とよぶものも、実はこの élan にほかならず、生物界の各種は、木の枝が幹から分れるように、順序よく進化したものではなく、最初から網の目のように錯綜したものが、élan によって現われ、それがまた élan によって全体的に前進上昇して来たものなのである。<sup>10)</sup>

## II

《生命の躍進》(élan vital) というベルグソンの主要概念は大体以上のようなものであるが、その所説の核心がもともと反主知主義の徹底にあるところからして、ややもすれば情緒的神秘的實在論として受けとられ、厳密な科学的知性、あるいは日常の経験的方法をもってしてはとらえることができないようにみられがちである。事実、ベルグソン哲学に対するかつての反対や批判のほとんどは、この面にさし向けられたものであった。しかしこのことは、彼にとってむしろのはずれの論となる。というのは、彼にとって知性(intelligence)とは、たんに対象を分解したり再構成したりする分析的思惟能力ではなく、むしろ「意識に直接与えられたもの」としての實在～持続～のなかへ奥深く入って行って、その心臓の鼓動に一挙に触れようとする実用的手段であると考えられるからである。物質と精神とがそれぞれ實在の半分を形成するものであることが主張されるとともに、科学と形而上学はそれぞれ独自の方法において、いずれも絶対的なものに触れることができるとされるが、形而上学的意識は、「対象の有するユニークな、従って不可表現的なものと合致するために、ひとがそれによって一つの対象の内部に自

己を移し入れるところの共感」(la sympathie par laquelle on se transporte à l'intérieur d'un objet pour coïncider avec ce qu'il a d'unique et par conséquent d'inexprimable)<sup>11)</sup>としての《直観》(intuition)という独自の本能的方法によって支えられるのである。分析的方法が実在を相対的にしか認識し得ないのに対して、直観は生命の流れをその内面からとらえる絶対的な認識を与えるのである。<sup>12)</sup>要するに見るものは働くものと一つにならねばならない。直観は、実用のために外に向けられた意識の眼を内に転じ、ひたすら現実と共感しようとするときに成立する。

ベルグソン哲学が反主知主義として批判せられる大方の理由は、この《共感》としての直観を哲学の方法として力説したことに起因するものであろう。たしかに悟性や弁証法を越えて、対象との直接的合致という側面を有するかぎり、ベルグソンの直観が神秘主義と結びつけて考えられるのは当然である。すなわち、事物について真の事実を提供する資格が悟性に対して拒否せられるとするならば、宇宙の生成に関するベルグソン自身の説明はその効力を失うことになりはしまいか。彼の説明はまことに知的で、われわれの合理的知性に訴えるような明晰な論証によって組み立てられているのであるが、しかしそれだけに、もし悟性をもって、非連続で動き得ないものについてのみ明瞭な観念を形成し得る～つまり持続・生命を理解するだけの能力を持たない～とするならば、その理由を明らかならしめようとして提出された議論は、それが悟性的であるがゆえに、非創造的であり、従って事物の本質に到達し得ないものといわねばなるまい。たとえば、ベルグソンがみずからの哲学を構成するに当って省察の材料とした生物進化のよろもろの事実も、また悟性によって発見されたものであるから、もし悟性が信をおくに足らぬものとするならば、進化の事実は真理であることができぬし、従ってベルグソンの全体系は根底から揺らぎ出すことになる。

だがそれにしても、ベルグソンが物質に対して精神を、悟性に対して直観を主張したことは、従来の哲学がややもすれば理知を概念的・形式的に推し及ぼし、実在をばバラバラに分解してみる傾向に対して、それをいわば巻き返して对象的・総合的にとらえようとする努力であったことは十分認められてよいだろう。直観という観点に立てば、合理的知性にとって難解とも不可思議ともみえる宇宙の原理も、本来持続的なものとして理解し易く、物質世界をも「単一な流動にまで融け合ったもの」として生命的に読みとることができる。

これは、哲学をもって厳密な理性の学とみなす者にとっては、すなおに肯定し難いところであろうが、しかしただ整然たる論理的・概念的体系の建設ばかりが哲学の仕事ではなく、われわれの基礎体験はもっと具体的なもの、生命的・躍動的なものであらねばならないことも真実である。思惟を本質とする人間の行動は、たんなる公式的自動機械のそれとはちがひ、環境の変化につれて対応し、順応し、一本調子に猪突することもしなければ、また観念の盲目的追随者にもなってはならないはずである。

ベルグソンの思想の独自性は、あくまで現実を現実としてすなおに肯定することである。

流動的・持続的な現実に形式論理的な分析抽象のメスを加えて勝手気ままに分割したり、その片々にさまざまな言葉を命名して、現実を言葉の体系とすりかえたり、言葉の集積から再び現実を築き上げたりするような哲学方法に、彼は反対するのである。それをやれば、現実はあるものをやいのちを失った別のものになってしまう。

むろん思慮を無視したたんなる行動は、ひつきよう感情にすぎないが、またその反面、事物を窮屈な観念の型にあてはめて構成しようとする自然科学的合理主義もまた、現実に即しない一個の空想でしかない。哲学の本来の面目が、あくまで事物に即し事物に従って観念をつくる場所にあるとすれば、「生を生そのものから理解しよう」とするベルグソンの思想は、一見独断的とみえながら、実はあくまで現実に忠実ならんとする科学的直観の成果であったといえる。<sup>13)</sup>

それゆえに、真の現実を認識するには、現実を抽象化・論理化し、それによって未来を計算し予測する形式的悟性の習慣を打破しなければならない。流動的・持続的な現実を原子的なバラバラの要素に分割したり、つなぎ合わしたりすれば、それは全く別なものになってしまう。伝統的物理学の世界にあっては、物体の「不可滲透性」が厳存するといわれているが、しかし真の根源的事実としては、その物質すらも「相互滲透性」を本質とするものであって、持ちつ持たれつ<sup>メロディ</sup>の関係において全体を構成しているものと考えられねばならぬ。あだかも一つの旋律が部分を持たないのと同様である。一つのメロディを数個ないし数十個の音に分解しても、それはもはやそれぞれの独立した音であって、それらのたんなる寄せ集めは決して音楽的メロディにはならない。従って、持続の先行状態と後起状態との間に切れ目は存せず、前者がまだ終わらぬうちに後者はすでに始まっているのである。そして内的持続が含む各瞬間は、いかなる瞬間といえども何らかの新しいものを含むのであり、相互滲透しつつ形成される意識状態の多様が、すなわち質的多様にほかならない。

ここではもはや、理性は従来の優位を保ち得ず、それに代わって、進化し創造する《生命》が問題となる。そしてこの持続的生命はやがて、古典物理学的自然観に依拠する機械的決定論では割り切れぬ人間のあり方をさぐる根本概念として規定されるのである。<sup>14)</sup>

ここでわれわれがとくに留意しなければならないことは、ベルグソンにおいて、悟性あるいは知性が直観に対立するということが、決して知的認識を放棄するということを意味するものではないことである。直観はあくまで概念的・分析的思索を基盤とし、悟性はその固有の機能によって作り出した概念もしくは観念の助けを借りなくてはならず、両者はいわば相互扶助の関係にある、ということである。悟性はその固有の傾向に従って、みずから生み出す概念のどちらが実在の分節化と合致するかを直観によって教えられねばならず、直観はまた悟性のはたらきを前提し、これを追感し反省するところに成立するのであるから、悟性の認識する実在がニセ物であるとか、直観のとらえる実在のみが本物であるとかというのではない。実在は唯一である。その唯一の実在を悟性は各側面からみて一面化し、固定化し、法則化して研究

するのであるが、全体を一挙に洞見することはできない。そのいろいろな研究を総合して、實在を全体的・統一的に認識していくのが直観の機能だ、というのである。結局、悟性と直観との対立関係は、悟性がいわば外に向っているのに対して、直観が内に向い、悟性の向う方向を逆にさかのぼる努力である、という点に存する。<sup>15)</sup>

それゆえ、ベルグソンの思想は、従来とかく評価されたような神秘的「生命哲学」につきるものではなく、むしろ経験的事実に即した科学的労作と形而上学的思索とをその根底とするところの、きわめて実践的なものであるといえよう。

### III

以上、彼の著作内容に即しながら考察したところからもわかるように、ベルグソンの《創造的進化》の理論は、機械論と目的論とのいずれにもそのままくみするものではない。しかし、いましてこれに目的論の語を冠しようとするれば、その目的とは、もちろん既成のものとして前途に措定された観念ではなく、むしろ物質的必然性から自己自身を解放せんとする意識の発展を指しているのであって、しかもじっさいはそれが目的だというのではない。目的という以上は、それはすでにでき上がってしまったプログラムを意味するのであるが、たんなる既定のプログラムの遂行にはもはや創造的な何もかも含まれてはいない。ライブニッツの徹底的目的論は、このプログラム式世界観の典型ともいうべきものであって、それは、ベルグソンによれば、「さかさにされた機械論」(un mécanisme à rebours) にすぎないものであった。かような意味での目的論は機械論と全くおなじ要請の下に立脚するもので、両者の異なる点は、われわれの有限な知性が事物の明白な継起現象をたどってゆく過程で、機械論がその導きの灯をわれわれの背後におくのに対して、目的論はその光をわれわれの行く手に置く、というだけのことにとすぎない。<sup>16)</sup>

自然界、ことに生物界において、目的意識のないところにも一見合目的的活動が実現されているところから、われわれはとかく自然界を目的と計画をもつ向目的的存在、という考えに導かれやすい。しかし、それは人間の脳裡にある目的観念の客観へのたんなる投影にとすぎない。自然、ことに生命は、何ら価値的原因によるものでもなければ、目的に向うものでもない。不断に進展しつつある世界の真相は、決定論・非決定論というような観念的構成のワクを越えた見地からのみ、いうならば、意識が必然であり、物質が自由であるような見地からのみ、理解されねばならない。機械論の反対はすなわち目的論、と単純に二律背反的に割り切って考えるような、いわば平面的眼界からはとうてい理解され得ないのである。じっさいの意識は物質の上からのぞむ原理でもなく、物質が目指して進むべき目標でもなくて、物質それ自身のなかにあるもの、いな物質そのものの本質的構造にほかならない。これがすなわち、具体的な現実である。

このような生命的意識をベルグソンはまた《超意識》(supraconscience) ともいっている

が、それはカント的な《超越的意識》(transzendentes Bewusstsein)のような観念的な概念ではなく、あくまで科学的原則なのである。この超意識は湧き超える波濤のように上昇そのものである。物質をつらぬき通す無限の潜勢力、それ故にはなほだパトス的なものと考えられる。それは「一つの中心から湧き超り、くずれ、広がってゆく」のであるが、しかし人間を除いてはどこでも行き詰まりにおちいった。なぜなら意識は低次の物質と必然的に衝突するからである。<sup>17)</sup>けれども、それは必然そのものである物質をとらえ、これと闘争しながら、これに打ち克つことによって、かえってそこにできるだけ多量の不定性と自由とを導入しようとして、困難な茨の道をたどって行こうとする。その意味において、意識的生命は、落下しようとする重量を再び上昇せしめる努力、ということが出来る。ベルグソンのいう *élan vital* とは、要するにこの《創造の要求》(une exigence de création) という一点に帰するといつてよい。<sup>18)</sup>そしてそこにまた、彼は人間性を洞見する。精神ないし意識は知性を越えているがゆえに、物質の制約をも越えることが出来る。*élan vital* という見地からすれば、人間は多くの障害、をいな死でさえものり越えて進むことが出来る。<sup>19)</sup>

要するに、ベルグソンの哲学においては、自然が持続し発展するのである。その自然をたんに悟性の対象とするということは、それを端的に客体化することであり、従ってそれから主体的生命を奪うことになる。自然のなかに生命の息吹がかよようにしても、悟性はそれを感じとることは出来ない。また悟性にとっては、変化流動する自然の各瞬間における状態のみが問題であって、状態と状態とを結ぶ変化の内的持続は、関心の対象とはならぬ。しかし人間は、自然に対して悟性的態度以外に、流動する現実をありのままにみつめ、対象に身をよせて死せるものをも生けるがごとく体験しようとする内感的要請をもつことも事実である。ベルグソンの哲学は、決して低次の物質を否定するのではなく、むしろ物質を媒介とし、その底を流れる生命独自の活動～生命の純粹持続～を見逃してはならないというのである。それをあくまで、厳密な哲学的分析と科学的検証とで裏づけ、従来いとなまれて来た同様な論証の最後をなすところに、彼の哲学の現代的意義を汲みとるべきであろう。生の創造的進化～あらゆる障害を克服して自己を拡張する姿～、一言でいえば生の持続であるが、この持続説こそ、ベルグソン哲学における真に独創的な部分とみななければなるまい。

最後に、ベルグソンの哲学、とくに「創造的進化」に一貫する特徴として、それがはっきりした主義綱領を形づくる風にはまとめられてはいないことを示す。彼は偏狭な機械論的決定論を排斥するかと思えば、その刃を転じて目的論にも攻撃を加える。観念論的色彩を多分に帯びながら、他方また実在論や唯物論とも驚くほどの共通点をもつというぐあい、われわれはそこに一定の類型にはまった立場をみるのが困難なように思われる。それはつまり、機械論とか目的論とか、観念論とか唯物論とかいう公式主義におちいった立場は、彼にとっては、要するに予定されたレディ・メイドの型、いわゆる「事後」(après coups)の思惟であって、決し

て「事に即従して」(au fur et à mesure)ではない、という考えにもとづくものだからである。もし哲学というものを、固定化された思惟形式とみないで、ありのままの現実をすなおに肯定し、そこに「根源的なものをさぐろう」<sup>20)</sup>とする融通無礙の自由性にある、と考えるならば、われわれはこの非完結的なベルグソン思想においてこそ、もっとも生きた生命哲学の典型を見得るといえよう。もし、概念の厳密さがそのまま具体的真理を表現するものではない、ということ、われわれが認めるとするならば……。

注：以下のベルグソンの著作は、1963年版の“OEUVRES” de Henri Bergson, éd. P.U.F に所載のものから引用した。この選集の中には、1) Essai sur les données immédiates de la conscience (1889), 180 pages, 2) Matière et mémoire (1896), 780 pages, 3) L'évolution créatrice (1906), 372 pages, 4) Les deux sources de la morale et de la religion (1932), 340 pages, の四大著作のほか、5) Le Rire (1900), 167 pages, 6) L'Énergie spirituelle (1919), 214 pages, 7) La pensée et le mouvement (1934), 291 pages, などが含まれており、編者 André Robinet によって厳密な原典校注が加えられている。以下の引用書のページは、それぞれの著作の傍欄に示された刊行時のものに基づいており、従って OEUVRES 自体のページには拠っていないことをことわっておく。

- 1) cf. L'évolution créatrice (以下 E.C. と略記), Chap. I.
- 2) E. C. Introduction, viii.
- 3) Essai sur les données immédiates de la conscience, p 115.
- 4) E. C. p. 60.
- 5) E. C. p. 62~63.
- 6) E. C. p. 88.
- 7) 生命の意義については、E. C. Chap. III において詳細に述べられている。
- 8) E. C. p. 89.
- 9) E. C. p. 89~90.
- 10) cf. E. C. p. 97~98.
- 11) La pensée et le mouvement, p. 181.
- 12) ibid.; cf. E. C. Chap. II.
- 13) 実証科学も形而上学もともに直観をこそ真の方法とすべきで、このゆえに両者は直観において合一し得るとして、ベルグソンはつぎのごとく述べている。「Une philosophie véritablement intuitive réaliserait l'union tant désirée de la métaphysique et de la science. En même temps qu'elle constituerait la métaphysique en science positive—je veux dire progressive et indéfiniment perfectible,—elle amènerait les sciences positives proprement dites à prendre conscience de leur portée véritable, souvent très supérieure à ce qu'elles s'imaginent.」(La pensée et le mouvement, p. 216~217)  
従って、このような直観の材料は実証科学による観察と実験の総和であるとして、「Elle (真に直観的な哲学) aurait pour résultat de rétablir la continuité entre les intuitions que les diverses sciences positives ont obtenues de loin en loin au cours de leur histoire, et qu'elles n'ont obtenues qu'à coups de génie」(ibid. p, 217).
- 14) 「創造的進化」の中で、「Dans l'absolu nous sommes, nous circulons et vivons」(E. C. p. 200) と述べているが、この l'absolu という言葉で彼が意味するものが、生命一般あるいは生命全体にほかならない。むしろ彼は、いきなり生命一般へと達するのではなく、さまざまな手続きをふんだ後に、われわれが実際に経験する事実としてそれを示そうとするのである。
- 15) cf. La pensée et le mouvement, p. 38~44.
- 16) E. C. p. 39~40.
- 17) ここにベルグソンは、生命に内在する爆発力と、生命が物質から受ける抵抗という2系列をみているが、しかし彼が考えていた唯一の實在は生命の流れであり、それは物質をも内に含むものである。「En réalité la vie est un mouvement, la matérialité est le mouvement inverse」(E. C. p. 250): 「……nous indiquons

que le sectionnement de la matière en corps inorganisés est relatif à nos sens et à notre intelligence, et que la matière, envisagée comme un tout indivisé, doit être un flux plutôt qu'une chose]. (E. C. p. 187).

18) E. C. p. 252. cf. ibid. p. 269~270.

19) E. C. p. 271.

20) [L'objet de la métaphysique est de suivre jusqu'à la source.] (La pensée et le mouvement, p. 260).